

通諸士之御禮被爲請之、尤於席々御目見有之、

〔御留守居勤方手扣〕安政六未年三月三日 六半時、熨斗目麻著、部屋江出、五ッ時、御廣敷江一同

罷出、伺御機嫌、上巳之御祝儀申上、菱餅二度出、御重壹組持出、御雛拜見ニ付、御菓子被下候旨、表使

申候に付、一同御禮申上、御用人部屋江引〇下

〔幕朝年中行事歌合上〕十五番 左 上巳參賀

君をまづ祝ふ心のいそがれておのがみの日はらひをもせず〇中

上巳は、年毎に三月三日、白書院にして、三家の方々、溜詰の面々拜賀す、後大廣間に渡御有て、國

主の面々よりはじめ、大小名の拜賀を請らる、皆のしめ長袴を著す、此日土御門家より、巳の日

の祓撫物などを參らせ、また兩御所より、御臺所姫君の御かたぐへ雛を贈らせ給ふ、執參の

輩よりも、是を奉る事有、

〔親元日記〕寛正六年三月三日庚戌、御祝物調進上之、自此御節供、今出川殿始進上之、仍三御方也、

〔親俊日記〕天文七年三月三日丁丑、細川殿御出仕、馬頭殿御出仕、貴殿依不例、無御出仕云々、桃花節

會拜見、

〔駿府政事録〕慶長十八年三月三日、節供之爲御禮、諸大名出仕、於南殿御目見、二十年三月三日、大

御所南殿出御、日野唯心、其外諸士御禮如例之云々、

〔有徳院殿御實紀附録十六〕なにごとも、繼絶興廢のこと、まつりごち玉ふあまり、公武ともに久し

く絶たりし曲水の宴を、一度おこし玉はむとの御事にて、成島道筑信遍に仰ありて、中右記等を

はじめ、和漢の書の中より、古例あまねくさぐりもとめられ、そのうへにも御みづからの盛慮も

て、古今を斟酌し玉ひ、遂に一時のおきてをさだめられ、享保十七年三月三日、その事行はるべか

りしに、雨にさはりて、同じき四月二日、遂にとげ行はる、巨勢大和守利啓、田沼主殿頭意行、小堀土